

現代型環境変化と地域における生活文化の変容に関する研究

その6 誰が民俗を実践するのか？

—集落の人口構成の変化と家の世代深度にみる民俗・慣習の実践者—

The Modern Environmental Changes and the Life and Culture Transformation
in Northern Tohoku Region, Japan

Part 6. Who Participates in Folk Customs? The connection between the house generation depth and the participants given the changing age structure of the rural villages in Iwate Prefecture

原英子^{*1}・千葉俊之^{*2}・佐々木隆^{*3}・本間義規^{*3}・川崎雅志^{*2}・大里怜子^{*2}

KUSABA Hara Eiko, CHIBA Toshiyuki, SASAKI Takashi, HONMA Yoshinori,
KAWASAKI Masashi and OSATO Reiko

Summary

Growing number of settlements in rural areas in Japan were supposed to have been endangered due to population outflow and the low birthrate. Based on reports made a half century ago on four settlements in Iwate Prefecture of the Tohoku district of Japan, we've conducted a questionnaire survey to compare the current situations with those of the previous reports.

In the paper, we compare each settlement, observing how the age brackets within the population compositions have changed, since it is believed to be an important factor for folk events to be maintained. Then, we review in detail "Drawing of the sacred water" on New Year's Day, one of the annual folk events. How and in what form has the event described in the reports 50 years ago developed been maintained up to now? Although it had vanished in some settlements, leaving just memories of it in residents in the reports of 50 years ago, it has been proved that there are some homes, if not many, which are still practicing the ritual event. However, it has also been proved that long held cultures have not necessarily been maintained even if only a few families in settlements with old history have maintained such folk events. We should draw attention to the methods of maintaining folk customs and collecting documents.

Keywords: *The Changing Age Structure of the Rural Villages, Generation Depth, Folk Customs*
集落の人口構成の変化、世代深度、民俗・慣習

はじめに

日本の地方で暮らす人々にとって、近年、人々が暮らす上で家や集落の機能や役割は変わってきた。柳田国男によってはじめられた日本民俗学は、人々の間に伝承されてきた慣習や言い伝え等を、日本民族の基層文化と関連付けて解釈しようとしてきた。そうした柳田国男の思想のもと、地域の民俗・習慣の伝承を収集する試みは、「消滅する以前に」収集をせねばならないという観点から、全国的に展開されてきた。このように、日本の集落の「理想的」「あるべき姿」を追い求めて収集された柳田国男が 1962 年に没してから、すでに半世紀が、経とうとしている。

柳田の時代と比べ、日本の地方集落の姿は多方面で変化してきた。集落での少子化、高齢化がすすみ、集落人口の年齢構成が大きく変化した。日本の地方の多くの集落では、人口流出や少子化により、存続さえ危

惧される問題となっている。集落の維持自体が困難な状況にある場合、集落に伝承されてきた地域の民俗・慣習はどのような状況にあるのだろうか。本論では、地域の民俗・慣習の伝承が、現在どのような状況にあるのかという点に注目するため、ひとつには、集落を構成する人口の年齢構成の変化を明らかにする。現在日本の僻地集落では、集落としての機能を維持するのが困難なほど人口流出がおり、そこに残った人々の年齢構成の偏りが原因で民俗文化の継承に危機を与えている場合がある。たとえば、出生率の低下は子どもの減少をまねき、それは子ども主体の行事の継続を困難にさせている。また、働き盛りの青壮年層の流出は、集落行事の存続を困難にさせている。こうした民俗行事の担い手の問題を考える上で、集落人口の年齢構成の変化は重要である。

第2の注目点は、柳田国男の思想を根幹にすえて発達してきた日本民俗学は、「民俗」・慣習がいつから始

*本稿は、2010年9月にフィリピンレガスピシティーにおいて開催された、「The 4th Asian Rural Sociology Association International Conference」において発表した内容を改変してまとめたものである¹⁾。

*1 国際文化学科 *2 生活科学科食物栄養学専攻 *3 生活科学科生活科学専攻

まったのかについての関心が薄く、「昔」から受け継がれてきたことを前提としてきた[島田 2010 : 37]。この点について、民俗を継承しているのは誰かという面から、集落における家の世代深度と民俗・慣習の実践者との関係を明らかにしていく¹。

本稿は、岩手県立盛岡短期大学が1959年から1963年にかけておこなった4つの集落の「生活調査」の報告書から今回作成したアンケート調査結果をもとに、民俗・慣習の継承について、民俗の実践者と集落における家創出の長さの相関関係をみるために、民俗実践者の家の世代深度を分析し、考察していく。とりあげた民俗行事は、現在、わずかな家でおこなわれている正月の民俗、「若水汲み」である。民俗の実践者は、果たして古くからの家の人たちなのだろうか。従来の日本民俗学では、50年前に、集落によってはすでに消滅してしまい、記憶のみが残る「若水汲み」が、現在も、ほんの一握りの家々がおこなっている場合、それは、民俗・慣習を残存させている家が存しているという視点から、その習俗を記述する傾向にある。この点に注目して分析していきたい。

1 調査方法と調査対象

<1>調査方法

1959年から1963年にかけて岩手県立盛岡短期大学が4つの集落で調査をおこない、『生活調査報告書』を

¹ 1980年代以降、イギリスの歴史家、E・ホブズボームらの「伝統の創出」という認識によって、「伝統」とは近代国家における創出された発明との視点が注目され、伝統と文化、それに記憶への研究が進んだ。すなわち、伝統とは、近代に対置するものとして近代国家＝ネーションと民族的アイデンティティのかかわりにおいて、近代化の過程のなかで「創出」されたものであることが指摘されたのである[Hobsbawm and Ranger 1983]。こうした指摘がなされる一方、日本民俗学では、依然、民俗の現在の「変容」という視点や、「昔から」の民俗をサルベージする傾向が続いている。こうした体制に対し菊地暁は、日本民俗学の最先端的の研究として4点を指摘している。①「民俗のサルベージ」②「民俗の現在の変容」③「民俗概念の拡張」④「民俗誌の歴史的再検討」である[菊地 2009:782-783]。菊地が指摘する①②には、日本民俗学があつてきた「民俗」とは「日本民族」の「基層文化」の追求という側面が強いことが示されている。菊地は、近代西欧による他者の表象の問題のなかで、日本の動向について柳田国男について注目し、民俗学が、近代への対応として歴史的運動として形成されてきたことを指摘している[菊地 2001 : 6-10]。菊地のこの論点は、興味深い。

各集落で出している。岩手県立盛岡短期大学の後継である岩手県立大学盛岡短期大学部では、およそ半世紀たった2008年から2009年にかけて、この報告書をもとにアンケートの質問項目をつくり、同一集落でアンケート調査をおこなった。

<2>調査対象

(1)調査集落

本論であつかう集落は4つである。いずれも日本の東北地方、岩手県北部にある集落で、現在の行政区分では八幡平市西根町中村、盛岡市玉山区洪民船田、宮古市川井小国、久慈市小袖である。それぞれ1959年、1961年、1961年、1963年に盛岡短期大学による調査がおこなわれた。

各集落の特徴は次のようである。西根町中村は中世以来続く農村で、集落としての団結力が今でも強い地域である。近隣には、やはり中世以来の伝統をもつ集落が存在している。この付近の集落は、それぞれが集落として強固なアイデンティティをもっている。中世には、中世の山城が存在し、その付近に展開した集落が多い。中村もそうした集落のひとつである。田頭城を中心に、その山麓に展開した田頭村のなかのひとつの集落である。洪民は、西根町の東に隣接する農村であるが、現在は盛岡市に組み込まれている。ここは、特に1970年前後ころから、盛岡市郊外のベッドタウンとして住宅開発が進んだ地域で、人口流入が大きい。川井小国地区は、2010年に宮古市と合併したが、それ以前は川井村として岩手県の中心都市である盛岡市から、岩手県の東海岸にある宮古市へぬける街道沿を中心に展開した山村である。標高1917メートルの早池峰山をはじめ、山々が連なる北上山地に位置し、林業が盛んな地域である。久慈市小袖は、岩手県の東海岸北部に位置する漁村集落である。小袖海岸は、陸中海岸国立公園となっており、酸素ボンベを使わない、女性の潜水漁が有名で、この種の漁法の日本の北限となっている。このような4集落で、調査をおこなった。

(2)昭和30年代の「典型部落」

調査の対象となった4集落は、いずれも岩手県で1956年度からはじめられた「農漁家振興対策」の拠点となった「典型部落」に指定されている。「典型部落」では、農家小組合が活動の母体となって中小農家のレベルアップを目指した活動がおこなわれた。岩手県農務部農林企画室が1963年に出した『典型部落 農家小組合要覧一昭和31～37年度指定全部落』をみると、その活動状況がわかる。たとえば、農家の経営について、コンクールを開き、よい経営をした者を表彰したり、相談会を開催したり、部落公民館を設置するための助成をうけることができるような取り組みをおこなったり、活動を広報するための「農漁家通信」を発行

したりしていた。当時の「農漁家通信」をみると、その主眼となった取り組みが概観できる。そこに表れてくる主題は農家、農村の近代化である。従来の農業経営を近代化する取り組みとして、資本と農業のあり方を近代化するための取り組みを考えさせたり、従来の農家の嫁に代表されるような、旧態の家のあり方を問い直す機会を与えたりしているのである（岩手県農務部農林企画室 1963）。

玉山村船田と久慈市小袖部落は「典型部落」を開始した 1956 年に、西根町中村部落と川井村小国の湯沢部落は翌 1957 年に、「典型部落」に指定された。「典型部落」に指定された部落数は、岩手県で昭和 37 年度までに 290 部落にのぼり、およそ 1 万戸を超える農家が参加した（岩手県農務部農林企画室 1963：はじめに）。

③昭和 30 年代の「生活調査」

日本の農家と農村が近代化を目指していた昭和 30 年代、岩手県立盛岡短期大学部では「生活調査」を行った。このとき、栄養・食糧の調査から栄養摂取の状態を調べたり、保険・衛生の調査から、水道水や入浴習慣について調べたり、衣類の所持状態や、住居の状態、育児に関する調査として、出産前後や新生児の状態について調査している。これらは当時の「典型部落」で目指していた近代化の度合いを知るため、農漁村の生活実態を明らかにしようとするものであった。このとき、調べられた項目には、年中行事等の民俗・慣習も含まれていた。本論では、のちにこれらの民俗・慣習、それも特に若水汲みに注目し、当時の近代化を目指していたころの記録と、それからおよそ半世紀を経た今日の状況を比較検討する。

2 集落の人口構成の変化と民俗文化の継承

<1>集落の年齢層の経年変化

(1)現在の年齢構成バランスの集落比較

民俗文化の継承を考えた場合、集落における各年齢層の年齢構成のバランスがそれまでとは大きく異なる変化をとらないことが、次世代への民俗・慣習の伝達を安定して行うのに重要な条件となろう。ここでは、集落成員の年齢構成の 50 年の経年変化を検討していきたい。

まずは、Table1-1 をみてもらいたい。これは、2009 年現在の西根、渋民、川井、久慈の年齢層の人数を比較したものである。Fig.1-1 は各年齢層の比率を棒グラフにして、各集落を比較したものである。表、グラフの年齢層の区分で注意しなければならないのは、第一に、各年齢層の年齢幅が一定ではないことである。それぞれの年齢層を百分率に直し、棒グラフ化した図ではこの点に注意してもらいたい。

Table 1-1 各年齢層における集落の人口(2009 年)

年齢層(歳)	西根	渋民	川井	久慈
0～5	14	24	3	24
6～14	20	67	12	49
15～29	33	101	29	107
30～49	56	161	42	145
50～69	84	203	87	147
70～	59	114	93	104

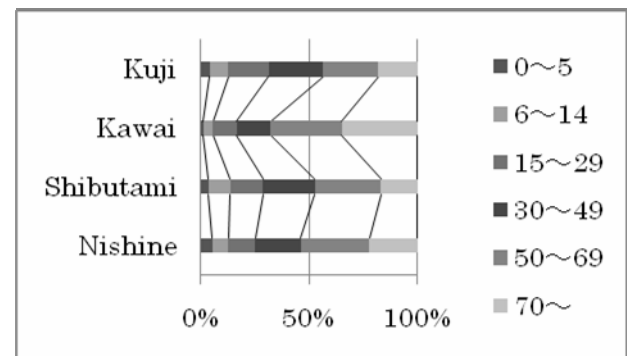


Fig.1 年齢層比率の集落比較

第二に、年齢をどこで区切るかという年齢区分の設定が、50 年前の調査と今回の調査で、必ずしも同じ区分とならなかった箇所がでてきた点に注意してもらいたい。今回のアンケート調査では、1960 年前後におこなわれた「生活調査」当時の区分をもとに設けた年齢区分である。しかし、ひとつには当時の報告書の年齢区分が、報告書によって違う箇所があり、それをどうするかという問題があった。またふたつめには、当時の日本人の平均年齢を現在と比べると、現在、飛躍的に伸びているため、1960 年代当時の 60 歳以上という区分にもうひとつ、70 歳以上という区分を設ける必要があった。その結果、0 歳から 5 歳までの乳幼児期、6 歳から 14 歳の小・中学生期、そして 15 歳から 29 歳の青年期、30 歳から 49 歳の壮年期、そして 50 歳から 69 歳、そして 70 歳以上と、年齢区分を設けざるを得なかった。

Table1-1 とそれを百分率でグラフ化した Fig.1-1 をみてもらいたい。この図表から以下のことがわかる。

①各集落とも乳幼児、小中学生という、いわゆる「子ども」としてとらえられる人口の割合が、50 歳以上、あるいは 70 歳以上と比べて低い。

②70 歳以上が人口に占める割合が大きいほど、人口の高齢化が大きいといえるであろう。それは、70 歳以上の人口比率が高いほど 49 歳以下の人口比率が低下するからである。

③人口の高齢化がもっとも進んでいるのは、川井である。人口の 7 割近くが 50 歳以上である。2 位が西根、3 位が渋民、そして 4 位が久慈である。もっ

とも高齢化率の低い久慈でも、50歳以上の人口割合が4割以上もある。

④50歳～69歳の年齢層の比率は、集落による違いがない。

⑤0歳から14歳までの人口比率は、川井を除いた久慈、渋民、西根ではほぼ同程度の比率を示している。

以上より、4集落ともに人口の高齢化が進み、子どもの数が減少していることがわかる。この人口構成は、以前と比べて変化しているのかいないのか。これが民俗文化の伝承にとって大きなポイントになると思われる。そこで次には各集落の人口年齢構成を50年前と比較してみることにする。

(2)人口の年齢構成比率の推移

人口年齢構成の集落ごとの推移をみってみる。各集落の50年前の年齢構成比率の比較は以下ようになった。集落名のあとに図表番号を付しているのので、合わせてご覧いただきたい。

(a)西根：Table 1-2(a)、Fig.1-2(a)

1959年と2009年の人口構成を比較すると、30歳から49歳の人口の比率は22%と21%とほとんど変化がないが、この年齢層を境に、それより高い年齢層の人口割合が増加し、それより低い年齢層の人口割合が減少している。

Table 1-2(a)西根：年齢構成の推移

年齢層(歳)	1959年(人)	2009年(人)
0～5	41	1
6～14	83	33
15～29	78	33
30～49	74	56
50～69	43	84
70～	12	59

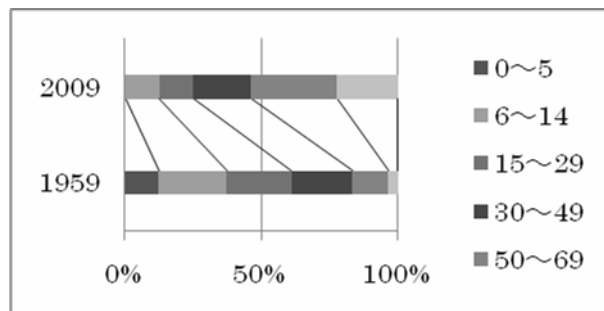


Fig.1-2(a)西根:年齢構成比率の推移

(b)渋民：Table 1-2(b)、Fig.1-2(b)

1961年と2009年で年齢区分が異なっているので比較しにくいですが、年齢区分が同じ部分、すなわち0-5歳、6-14歳、15-29歳を比較する、各年齢区分とも2009年は減少している。6-14歳の減少率は若干にすぎないが、その他の区分では減少幅が大きい。反対に高齢者人口はあがっている。1961年は60歳以上が12%、2009年は70歳以上が17%であった。これは年齢区分が10歳以上引き上げられているにもかかわらず、2009年度の比率が高い。また乳幼児を含めて、全人口の30歳以下の比率は、1961年が60%であったが、2009年には29%と半世紀の間に比率が半分以下となっている。

Table 1-2(b) 渋民：年齢構成の推移

年齢層(歳)	1961年(人)	年齢層(歳)	2009年(人)
0～5	30	0～5	24
6～14	18	6～14	67
15～29	44	15～29	101
30～59	43	30～49	161
60～	19	50～69	203
		70～	114

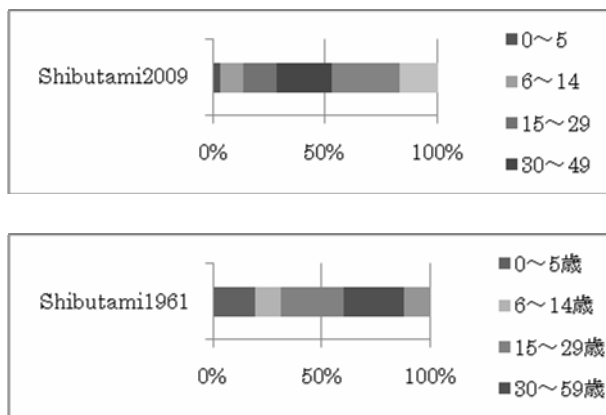


Fig.1-2(b)渋民:年齢構成比率の推移

(c)川井：Table 1-2(c)、Fig.1-2(c)

1961年と2009年の年齢区分が異なるので比較しにくいですが、0-5歳が11%から1%と減少が著しい。6-14歳も20%から4%と減少幅が大きい。同様に15-29歳が17%から11%の減少がみられる。反対に1961年の60歳以上は18%だったが、2009年の70歳以上で35%となっている。ここでも区分の年齢差が10歳あるにもかかわらず、比率が倍近くにまであがっているのがみられる。

全人口の30歳以下の比率は1961年で48%だったのが、2009年には16%と3分の1まで下がっている。

Table 1-2(c) 川井：年齢構成の推移

年齢層(歳)	1961年(人)	年齢層(歳)	2009年(人)
0～5	39	0～5	3
6～14	71	6～14	12
15～29	62	15～29	29
30～59	123	30～49	42
60～	64	50～69	87
		70～	93

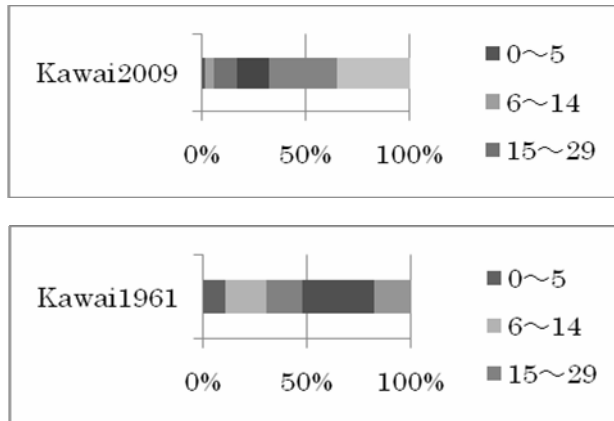


Fig.1- 2(c)川井:年齢構成比率の推移

(d)久慈：Table 1-2(d)、Fig.1-2(d)

Table1-2(d) 久慈：年齢構成の推移

年齢層(歳)	1963年(人)	年齢層(歳)	2009年(人)
0～5	27	0～5	24
6～11	45	6～14	49
12～29	65	15～29	107
30～49	38	30～49	145
50～69	18	50～69	147
70～	6	70～	104

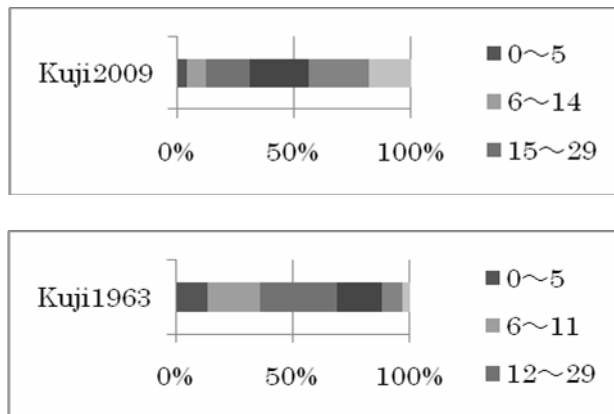


Fig.1- 2(d)久慈:年齢構成比率の推移

1963年と2009年で年齢区分が異なる。久慈では、0-4歳が1963年に13%だったのが、2009年に4%と3分の1以下に減少している。1963年の6-29歳は56%と全人口の半数以上を占めていたのが、2009年は27%になっている。こうした年齢層が減少する一方で、30-49歳は、1963年に19%だったのが2009年には25%と高くなっている。同様に50-69歳は1963年の9%が2009年には26%と3倍弱ほど増加した。70歳以上も、1963年に3%だったのが、2009年には18%と6倍に増えている。

<2>民俗行事の実践

(1)現在の年中行事の実践実態

アンケート調査では、いくつかの年中行事を各家で実践しているかどうかについての質問をおこなった。質問した行事は次のものである。

- ①水汲み、②元朝参り、③正月、④七草、⑤小正月、⑥春彼岸、⑦釈迦の誕生日、⑧ひな祭り、⑨子供の日、⑩盆、⑪秋彼岸、⑫クリスマス、⑬すす払い、⑭大晦日の年取り

これら14の行事について、行事をおこなっているかどうか、やめたのならいつやめたのか、あるいは習慣がないのかどうかアンケート調査に基づき、表にして集落ごとに、Fig2(a)西根、Fig2(b)渋民、Fig2(c)川井、Fig2(d)久慈として示した。

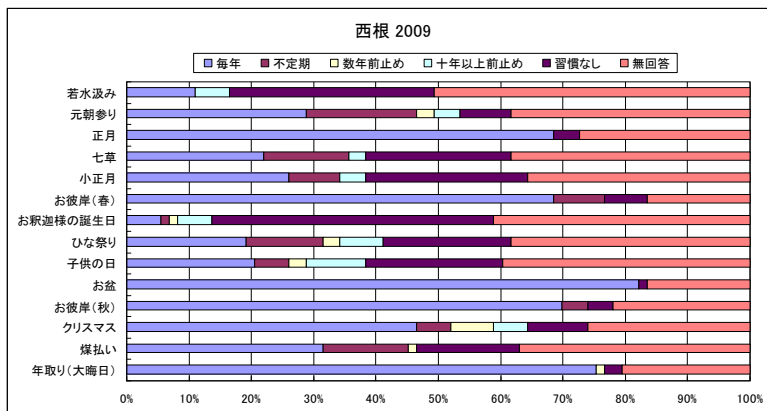


Fig2(a)年中行事の実行状況：西根

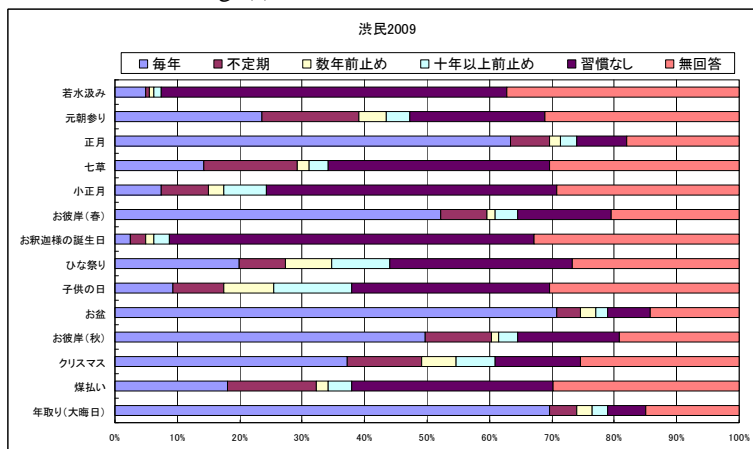


Fig2(b)年中行事の実行状況：渋民

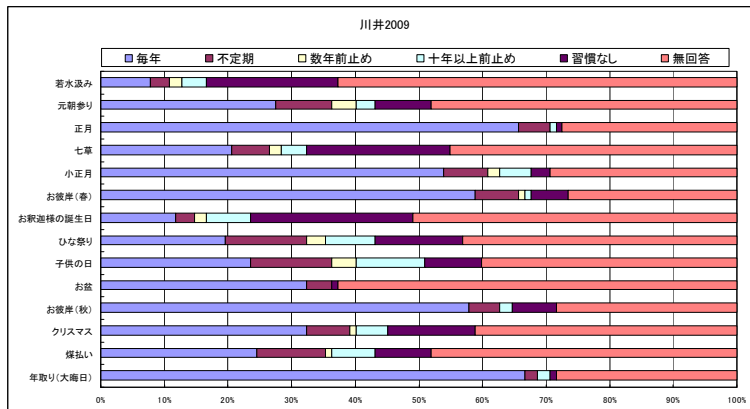


Fig2(c)年中行事の実行状況：川井

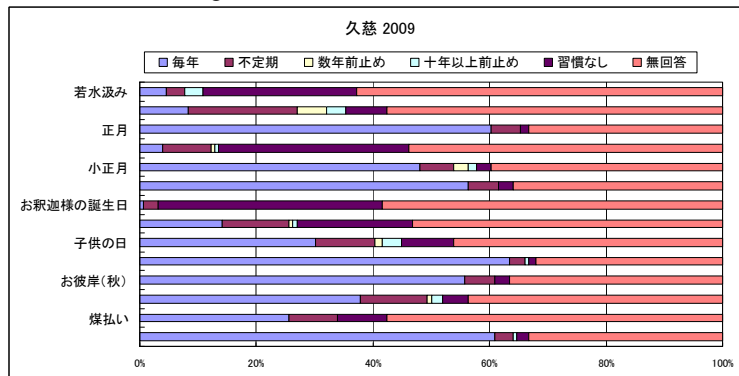


Fig2(d)年中行事の実行状況：久慈

(2)「若水汲み」の実施状況

14の年中行事のなかから、「若水汲み」という正月の行事に注目してみたい。

昭和30年代の調査では、「若水汲み」をおこなっていたか、あるいは過去におこなっていた記憶をもっていたとする行事として記載されている。しかしながら現在も完全に「消滅」してはならず、若干の家でおこなっていると答えている。アンケートの結果は以下のとおりである。

Table 2(a)若水汲実施状況：西根 回答総数 73

	頻度
毎年	8
不定期	0
数年前止め	0
十年以上前止め	4
習慣なし	24
合計	36
無回答	37

Table 2(b) 若水汲実施状況：渋民 回答総数 231

	頻度
毎年	8
不定期	1
数年前止め	1
十年以上前止め	2
習慣なし	89
合計	101
無回答	60

Table 2(c) 若水汲実施状況：川井 回答総数 103

	頻度
毎年	8
不定期	3
数年前止め	2
十年以上前止め	4
習慣なし	21
合計	38
無回答	64

Table 2(d) 若水汲実施状況：久慈 回答総数 156

	頻度
毎年	7
不定期	5
数年前止め	0
十年以上前止め	5
習慣なし	41
合計	58
無回答	98

(3)50年前の年中行事の実態

: 50年前の「若水汲み」の状況

(a)西根

1959年に書かれた西根の『生活調査報告』には次のような記述がみられる。

「元日〔若水汲み〕未明に歳男（一家の主人）が注連縄をはつた新しい手桶で、背戸の流れから若水を汲む。（昔はどの家でも飲料水として流れ水を使つた。ほとんど井戸になつた現在でも、若水は流れ水を汲むのが例である。この時餅を一切れ流れに沈め、朝食後引き上げて竹串にさし水置き場の棚などにあげておき、乾いてから食う。これを食えば虫菌にならぬという。）その水でお茶を入れてまず歳神様に供えてから家内中で頂く。若水を汲む手桶は、臼を伏せてその中に丸餅なら2箇か3箇、切り餅なら4箇か5箇と白米少々を入れ、注連縄をはつたものの上に置く。この「若水汲み」は正月三カ日の間毎朝行われる。若水汲みの際の唱え言は今はすたれてほとんど唱えられない。」（岩手県立盛岡短期大学 1959：4）

(b)渋民

渋民は、浄土真宗の寺院がおこなう行事を中心としたものが残っているが、以前はおこなっていたという年取り、正月の拝み松、七草、小正月の行事などは、明治後期にはまったく途絶えたという記述がみられる（岩手県立盛岡短期大学 1961a：3）。（盛岡短期大学 1961：3）。1961年の調査には、若水汲みの記述はない。

(c)川井

元日の行事として7日まで毎朝行われるものという記載が1961年の段階ではある。それによると、未明に歳男（一家の最年少の世つぎ）が新しい桶とひしゃくで水を汲み、この水で飯を炊いて神仏に供えるのだという（岩手県立盛岡短期大学 1961b：4）

(d)久慈

1963年の時点で、若水汲みは、「父祖の代には残っていた」が廃れた慣習として記されている（岩手県立盛岡短期大学 1963：3）。

以上より、調査がおこなわれた1960年前後では、「若水汲み」の行事は、家でおこなう行事として記載されていた。あるいは、川井のように、以前は行っていたと記憶する者が存在していた。渋民については、調査当時になかったのか、明治後期以前からなかったのか、報告書からはよくわからないが、江戸時代からの年中行事が、明治後期までにかかなり実践されなくなった記載がある。

3 誰が民俗を実践者するのか?
: 家の世代深度と民俗・慣習の実践者の関係

(1) 考察の視点

「若水汲み」という民俗・慣習を実践している家はどうな家なのだろうか。一般に民俗行事というのは、世代を重ねて継承されてきた習俗と考えられている。「若水汲み」について、1960年前後でも実施している家があったと記載されているものの、当時において、すでに以前は唱えられていた唱えごとがわからなくなっていたり、以前は実施していたと記憶はされているものの、実態がわからなかったりという状況であったことが記されている。

西暦 2010 年の今日でも「若水汲み」をおこなっていると回答した家がある。日本民俗学では、「古くからの習俗」を実践している場合、それは昔から継承された結果だと考えられる傾向にある。そうすると、2010年の調査で得た結果は、何世代も経たような世代の古い家に、細々と継承されているのではないのかという予想となる。

この予想は正しいのであろうか。以下、世代と民俗の関係について分析し、考察していく。

(2) 家の世代深度と民俗の実践者の関係

「若水汲み」を実践している家とその世代深度との関係を集落ごとに、Table3(a)、Table3(b)、Table3(c)、Table3(d)に示した。なお、アンケート調査の項目では、「以前はしていたが数年前に止めた」と「以前はしていたが十年以上前に止めた」という2つの回答を用意していたが、表ではこの2つを合計したものを「以前あり」として記した。

(a) 西根

西根の場合、全 73 軒中、若水汲みを毎年おこなうと答えた家は 8 軒で、十年以上おこなっていない家は 4 軒、数年前に止めたという家はなかった。また、習慣がないと答えた家は 24 軒であった。このうち若水汲みをおこなっている家、以前はしていたが十年以上前に止めた家、これらと習慣がないと答えた家は何か特徴的区別があるのだろうか。まず、家の創建の古さとの関係に注目した。

Table 3(a) に示すように、若水汲みを現在、あるいはかつて若水汲みをしていたと答えた家は 2 代目、3 代目、4 代目、6 代目、7 代目、8 代目の家で、3 代目と答えた家が 2 軒の他は 1 軒であった。特に、何代目の家に多いという傾向はみられない。また、8 代目 3 軒のうち、現在も実施している家は 1 軒で、他の 2 軒や 10 代目、30 代目の家は、現在していないし、「若水汲み」をしていたという伝承もきかれぬ。必ずしも家の古さが「若水汲み」の行事を実践しているのか、

あるいはしていた記憶は結びついていない。

Table 3(a)

「若水汲み」の実践者と家の世代深度の関係：西根
回答総数 73

世代	全地区	現在継続	以前あり	不定期
1代	9	0	0	0
2代	4	1	0	0
3代	8	2	0	0
4代	8	1	3	0
5代	5	0	0	0
6代	3	1	1	0
7代	3	1	0	0
8代	3	1	0	0
10代	1	0	0	0
30代	1	0	0	0
無回答	28	1	0	0

(b) 渋民

Table3(b)

「若水汲み」の実践者と家の世代深度の関係：渋民
回答総数 231

世代	全地区	現在継続	以前あり	不定期
1	13	0	2	1
2	15	4	0	0
3	13	1	0	0
4	6	0	0	0
5	1	0	0	0
6	2	1	0	0
7	8	0	0	0
8	1	0	0	0
9	1	1	0	0
10	1	0	0	0
15	1	0	0	0
16	1	0	0	0
20	1	0	0	0
無回答	43	1	1	0

渋民は、「若水汲み」を現在もおこなっていると答えた家が何代目かたずねたところ、2代目 4 軒、3代目が 1 軒、6代目と 9代目が各 1 軒であった。以前おこなっていた家は、初代が 2 軒であった。

上記の答えを答えた者を見ると、この 50 年ほどのあいだに、他地域から移住してきた家が多く、渋民でおこなわれている若水汲みを実施している、あるいはしていた家、あるいは不定期におこなっている家は 12

軒で、そのうち他地域から移住してきたと明確に書いた者は6軒あった。また、実施している家すべてに、居住後何年かをみてみると、50年以内に来ていると答えているものが多い(無回答もある)。つまり明治後期には、多くの年中行事をおこなわなくなったと50年ほど前の調査報告書で記しているが、浜民で、若水汲みを実施している家は、この調査のあとに移住してきた人々が多いといえる。

(c)川井

Table3(c)

「若水汲み」の実践者と家の世代深度の関係：川井
回答総数 103

世代	全地区	現在 継続	以前 あり	不定期
1	13	0	1	1
2	15	4	0	0
3	13	1	0	0
4	6	0	3	1
5	1	0	0	0
6	2	1	1	0
7	8	0	1	1
8	1	0	0	0
9	1	1	0	0
10	1	0	0	0
15	1	0	0	0
16	1	0	0	0
20	1	0	0	0
無回答	38	1	0	0

現在川井小国地区103軒のアンケート調査結果のうち、若水汲みを毎年おこなっている家8軒、不定期におこなっている家3軒、数年前に止めた家2件、十年以上前に止めた家4軒であった。現在も継続して若水汲みをおこなっている家、かつてしていた家は、創建からどのくらいたっているのか。現在何代目かを聞いた結果がTable3(c)である。

川井には10代以上続いているという家が4軒あり、もっとも長い歴史を伝承している家は20代である。しかし、こうした2桁の世代交代を重ねている家には若水汲みは継承されていないことに注目したい。

「若水汲み」を実施しているもっとも古い家で9代、かつてしていた家も含めると7代が1軒、6代が2件、4代が3軒、3代が1軒。2代が4軒という結果で、2代目や4代目に多くみられた。

これらのことから、川井においても、創立が古い家に、必ずしも伝承されていないこと、むしろ2代目など、比較的新しい家が現在もおこなっていることがわかった。

また、現在継続している家や、かつておこなっていた家で世代が長い場合でも、必ずしも同集落に移住しての年限は長くはないことに注意を払わなければならない。もっとも世代交代を長く認めている9代目の家は、同集落に住み始めて60年と答えている。またかつておこなっていた7代目の家は、同地区に住み始めて26年と答えている。同じく6代目は60年と55年、4代目は1年、76年、60年と答えている。また初代の出身地が、同地区以外と書いたものは17軒中5軒で、この5軒には、北海道や青森県などもみられる。つまり、若水汲みという年中行事は、家の創立が古くて、世代を重ねているが、他地域から移住した者がおこなっているケースが多くみられるということに注意しなければならない。

(d)久慈

Table3(d)

「若水汲み」の実践者と家の世代深度の関係：久慈
回答総数 156

世代	全地区 戸数	現在 継続	以前 あり	不定期
1	22	2	1	1
2	28	4	3	2
3	21	1	3	1
4	6	0	0	0
5	6	0	0	0
5or6	1	0	1	0
6	3	0	0	0
7	2	0	0	0
10	1	0	0	0
無回答	66	0	0	1

久慈156軒中、現在も「若水汲み」をしている家7軒、かつておこなっていた家8軒があった。

「若水汲み」を現在おこなっている家とかつておこなっていた家は、1軒だけ5代目か6代めとする家があるが、これ以外は、すべて1代目か2代目、3代目といった比較的新しい家である。

1963年の岩手県立盛岡短期大学の調査で、久慈の「若水汲み」は「父祖の代には残っていた」が、昭和30年代には、すでに廃れた行事として記録されている(岩手県立盛岡短期大学1963:3)。この廃れた行事が現在もおこなわれているが、これを実践している家は、比較的新しい家で、集落のなかでも世代を重ねた家ではないことが注目される。

(3) 家の世代深度と民俗の実践者の関係

以上、年中行事の実践者、誰が若水汲みを実践しているのかという問いに対して、「若水汲み」をしている

と回答した家の世代をみてきた。そこからわかったのは、すべての集落で、「若水汲み」を实践している家は、比較的新しい家が多いということである。あるいは、世代を重ねていても、現在の集落に移住してきてからの年数は50~60年以内であった。また、移住元の地域を記憶している場合も多かった。

これは、50年前に「若水汲み」に関する項目が調査され、記録されたのちに移住してきた人たちによって実践されていたのである。

終わりに

現在の日本の地方では、人口流出や少子化により、集落の維持が困難な状況にある集落が少なくない。そうした集落でおこなわれてきた民俗・習慣がどのような状況にあるのかを分析・考察してきた。実際には、岩手県下の4つの、異なる生業形態や集落環境をもつ集落を対象におこなったアンケート結果を分析してきた。

本稿は、大きく2つの部分についてみてきた。1つが集落の人口構成の変化を50年前と比較した部分である。その結果、4集落ともに、子供人口比率が50年前と比べ減少していること、その反対に高齢者の人口比率が増加し、高齢集落となっていることがわかった。50年前の人口構成と比べてみると、各集落ともに年齢層の比率がかわり、高齢者人口が増加していることから、この民俗・慣習の伝承への影響が考えられる。集落の民俗継承の状況と、集落の人口構成の偏りに関する考察は、のちの機会に譲りたい。

本稿の2つめの注目点であった民俗・慣習の実践者は、果たして集落における古くからの民俗の継承者か否かという疑問は、正月行事の「若水汲み」の実践者の家の世代深度との関係を明らかにすることにより分析した。このデータの分析は、従来の日本民俗学が、ある民俗が実践されていると、それを無批判的に、「古くから」継承されたものとしてとらえる傾向があることに対しての、検討という問題を含んだデータ分析であった。その結果、今日集落で実践する者が少数になってしまった「若水汲み」だが、この実践者と、集落で「古い家」であることは、必ずしも対応していないことが明らかになった。

現在の地方の集落の実態と、集落でおこなわれてきた民俗・慣習に関する継承の問題を、考えてきた。地方集落のあり方はどうあるべきか。民俗学が寄与する面は何か。今後考えなければならない問題は多い。

【参考文献】

岩手県教育委員会編 1986『岩手の城館跡』岩手県文化財調査報告書 82集
岩手県立盛岡短期大学

1959 『生活調査報告書』第1号(岩手郡西根村中村地区)

1961a 『生活調査報告書』第2号(岩手郡玉山村渋民船田地区)

1961b 『生活調査報告書』第3号(下閉伊郡川井村小国地区)

1963 『生活調査報告書』第4号(久慈市小袖地区)
岩手県農務部農林企画室

1963『典型部落 農家小組合要覧—昭和31~37年度指定全部落』

菊地暁

2001 『柳田国男と民俗学の近代—奥能登のアエノコトの二十世紀』吉川弘文館

2009 「民俗学の最先端」(日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善) 782-783

島田裕己

2010 『葬式は要らない』幻冬社

西根町史編纂委員会 1986『西根町史』上巻

Eric Hobsbawm and Terence Ranger, Eds.

1983 *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press

(1)KUSABA Eiko, SASAKI Takashi, CHIBA Toshiyuki, HONMA Yoshinori, KAWASAKI Masashi, OSATO Reiko

2010 Life and culture transformations from modern environmental change in north Tohoku region, Japan. Part4. Maintaining Japanese Rural Folk Culture, *Proceedings of the 4th Asian Rural Sociology Association International Conference*, 4, (in press)

【謝辞】

本研究を実施するにあたり、調査にご協力いただいた岩手県八幡平市田頭中村行政区(旧西根村中村)、盛岡市玉山区下田船田行政区1・船田行政区2(旧玉山村渋民船田)、宮古市小国(旧川井村小国地区)および久慈市宇部町小袖地区の居住者の皆様および自治会・関係機関の皆様に、記して謝意を表す。

なお、本研究は、平成20~22年度岩手県立大学 学部プロジェクト研究の一環として実施したものである。